

日本現代文学とクイア理論——世界文学との接点を求めて

中川 成美

一九九〇年代初頭に出現したクイア理論は、明らかにジェンダー研究の方向を、大きく蛇行させた。それまで曖昧にしか向き合っていなかったLGBTなど、男女間のヘテロ・セクシャルなジェンダー構成のみでは判断できない思考の回路を、再布置し、なお新しい理論の枠組みを構築しようと、スタートしたのである。初期において、LGBTのアクティブな運動などと連帯したクイア理論が、すぐに様々なアカデミックな領域での理論研究に資したのは、当然のことである。

しかしながら、主に社会学や歴史学に応用されたクイア理論が、日本文学研究の分析には、思いのほか浸透していない。その原因として、一つにはセクシュアリティに特化された形で語られがちなクイア理論は、専らLGBTの政治的アクティヴィティと密接に結びついたものという理解が日本では一般的であるのと、もう一方にフェミニズム、およびジェンダー理論と密接に結びついた批評理論が長く分析の主軸として機能してきた経緯を考えなければならないだろう。そもそも日本文学には女性作家の作品を「女流文学」、「女性文学」と呼称して別置する考え方があり、例えば書店には男性作家とは別に「女性作家」という棚を置く慣習が、長く存続した。最初から日本文学はジェンダーによる分別によって考えられてきたのであり、平安文学を除いて、文学の担い手は男性であり、研究もまた男性文学（という言葉はないが、文学とは男性作家の

作品に限られてきた）に力が傾けられ、近代文学研究においても樋口一葉や田村俊子、宮本百合子や林芙美子はまるで「名誉男性」のような扱いで「日本文学史」に位置付けられてきたのである。

とすれば、こうした偏頗な文学史構成から男女二元構造の外側にある作品は零れ落ちてしまおうであろう。そればかりではない。男女というセックス、セクシュアリティ、そしてジェンダーに括りつけられてきた意識や身体への認知のみでは量れない、その外側にあるものが作品を領有した時に、読者は思いのほか、そのことをこれまでの凡俗な男女二元構造で理解してしまいがちなのだ。この「奇妙な」、あるいは「逸脱」した認識の在り方に対して、日本文学は思いもかけない脆さを露呈する。それは逆説的に男女二元的なジェンダー認識の強度を証明する。勿論、世界の状況でも、多かれ少なかれ、このような峻別が厳然として存在し、それが日常生活を規定しているのだが、日本文学にあつて、それらを正面に据えて考察するという方法がこれまで探られずにきたように思えてならない。とすれば世界文学との課題の共有の場を確保していくためにも、新たな照射を文学研究に与えることは必要となろう。本特集は、そのような意図から企図され、同時に新たな研究の方法を、模索するものである。

ここで王洋はエドガー・アラン・ポーを翻訳しながら谷崎潤一郎に受

け渡された「怪奇趣味」が、ある種の韜晦的なディスコンストラクションを巻き起こして、その女性像の創造につながっていく経緯を論じた。狭間に落ち込んだかのような谷崎の思考停止は、単純な「東洋趣味」などではなく、ある異種の認知への気づきとなっている。

森祐香里は梅崎春生の「虹」で、花子というプロステチユートと名指しされようとする女性主体の揺らぎに注目した。また栗山雄佑は、目取真俊の「目の奥の森」を対象に、圧倒的な存在として作品の中心に据えられた「暴力」に注目して、それ自体を分析の中枢に据えた。その時に、身体的に繰り返される意味なき暴力の要因を支える不確かさで出口のない「欲望」の諸相を見出していく。

エステル・アンドレア・マルティネスはこれまでほとんど顧みられることのなかった文学のなかに不定形に浮遊する音楽の力に注目して、この不可思議な人間の感覚の問題を基軸に論を進めている。金昇淵は多和田葉子の『献灯使』を対象に、そこに描かれる男女二元的構造への懷疑に貫かれた作者の意思を読み取る。

この諸論文から気付かされるのは、クイアな欲望、それは奇妙な、あ

るいは因果のわからない解説不能な欲望とでも翻訳されようが、唐突に人間に訪れる身体を通した他者、そして自己認知の在り方は、セクシュアリティだけに固定されて引き起こされるのではなく、あらゆる人間の行為や交渉のなから生起するということである。あえて、それらに「クイア」という呼称を与えたときに、クイア理論の可能性に満ちた将来が理解されていくであろう。

文学が人間の内面を描くのだとすれば、その内面を支える身体や意識に起こりうるドラマに注目せざるを得ない。その意味でクイア理論は、私たち人間の存在そのものに小さな罅（クラック）を生じさせていく装置として認知されるべきであろう。それはとりもなおさず、他者への想像力に満ちた視線を獲得する道である。文学は未だ解明されないままに、読者の理解と共感を待ち続けている何ものかの宝庫だ。それを開くカギとなる言葉としての「クイアネス」を用いたとき、世界の文学はほかの顔を顔として共振し、共有の問題を語り始めるに違いない。